

ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

25/DEC. 2017 No. 1114



12月25日 月曜日

www.tokushukai.jp

発行：一般社団法人徳洲会
〒102-0083 東京都千代田区麹町3-1-1 麹町311ビル8階
TEL:03-3262-3133
制作：一般社団法人徳洲会 広報部
〒102-0083 東京都千代田区麹町3-1-1 麹町311ビル8階
TEL:03-6272-3687 FAX:03-3263-8125
Email:news@tokushukai.jp

新たなESD手技に熱視線

永田・湘南藤沢徳洲会病院医長 世界で初となる原著論文を発表

湘南藤沢徳洲会病院(神奈川県)肝胆膵消化器病センター・内視鏡内科の永田充医長(兼内視鏡センター副室長)は、大腸の腸管内を生理食塩水(生食)で満たしESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)を施行する「大腸腫瘍に対するUnderwater ESD(UESD)」に先駆的に取り組んでおり、これをテーマにした英語論文が消化器内視鏡分野のトップジャーナルである「Gastrointestinal Endoscopy(GIE)」に掲載が決まった。他のジャーナルを含めUESDに関する世界初の原著論文となる。

ESDは、がん細胞の浸潤が粘膜下層までにとどまる早期の消化器がんを、電気メスで内視鏡的に切除する手技。食道、胃、大腸のそれぞれに保険適用があり、広く普及している。



「UESDの目的は穿孔リスクを下げ、より安全に手術を行うことです」と永田医長

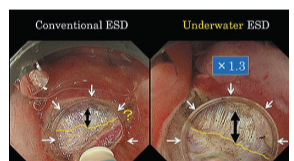
永田医長は約500例のESDを経験。UESDは2015年に開始、約30例施行。従来のESDはCO₂(二酸化炭素)を送気し消化管をふくらませて行うが、UESDは腸管内を生食で満たした状態で行う。

永田医長は「メリットは視野が良くなる、浮力が得られる、吸熱効果がある、この3点です。穿孔リスクを下げ、より安全に手術を行うのが目的です」とアピール。

視野に関しては、従来のESDの場合、粘膜下層表面が照明に反射して白っぽく写り、粘膜下層の線維化(硬くなること)が強いと筋層との境界が見分けにくくなる。これに対し生食を満たすことで反射がなくなり境界が明瞭になることに加え、視野が約1.3倍に拡大される効果もある(写真参照)。

浮力に関しては、大腸ESDでは通常、体位変換して重力を利用し剥離部分が視野にかからないようにする。だが、操作性や筋層との位置関係の問題から重力を利用できない状況では、UESDを行うことで浮力を利用し、剥離面をフードで押し上げるのが容易になり術野を確保しやすくなる。また水の吸熱効果で、電気メスによる熱損傷を抑えられる。

大腸のなかでも結腸を対象とし、適応は「癒痕などで線維化が強い症例、脂肪が多く視野が取りにくい症例、病変と筋層の位置関係によりUESDが適した症例に施行します」。直腸は出血しやすく、血液で水がにごると視野不良となるため、基本的に対象からはずしている。



良好な視野が得られるUESD(右)。左は従来のESD

臨床実践で重視しているのは、UESDと従来法のESDの有利なほうを、ケースバイケースで使い分けるという方針だ。

GIEへの掲載論文では、これまでのUESD症例の難易度や治療結果などを分析。いずれも重大な有害事象なしに一括切除でき、有用性と安全性を認めた。10月に福岡県で開催されたJDDW(日本消化器関連学会週間)2017の主演題(ワークショップ)では永田医長の演題が採択され、学会のメイン会場でUESDの手技や手術成績などを発表し、注目を集めた。現在は難易度が高い十二指腸ESDにもUESDを応用しているという。

生理食塩水で腸管を満たし手術

最後に医師、看護師、コメディカルグループに分かれ分科会を開催。それぞれの立場で①各施設の緩和ケアの取り組みの現状と課題、②今後の徳洲会緩和ケアセミナーのあり方と緩和ケアを発展させるための取り組みをテーマに、グループワークを行った。

事務所(〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14F) 03-3262-3133 業務を開始します。



多職種 80人が参加しレベルアップ

同セミナーは講演、グループ病棟の事例紹介、職種ごとのグループワークなど盛りだくさんの内容で実施。全国21施設から医師、看護師、薬剤師、MSW(医療相談員)、リハビリテーションスタッフなど80人が参加し、研鑽を積んだ。

冒頭、前野総長は「現在グループ内で7病棟が緩和ケア病棟をもち、それ以外の病棟も緩和ケアチームを組んで孤軍奮闘していると思います。徳洲会ならではの全国的な助け合いや学び合いをとおし、絆を強めていきましょう」と挨拶した。

「UESDの目的は穿孔リスクを下げ、より安全に手術を行うことです」と永田医長

「ホスピスのこころ」を共有

ホスピスのこころを共有

徳洲会グループは11月3日、札幌徳洲会病院の講堂で第1回徳洲会緩和ケアセミナーを開催した。発起人は札幌南徳洲会病院(旧名称・札幌南青洲病院)の前野宏総長。同セミナーは、グループ内でがん医療を強力に推進する機運が高まり、緩和ケアの重要性が認識されてきていることから、緩和ケアに携わる職員のレベルの底上げを図るのが狙い。今後は定期開催し、部会の創設も視野に入れている。



「ホスピスのこころ」の重要性を訴える前野総長

「ホスピスのこころ」を共有

緩和ケア部会創設も視野

事務所移転のお知らせ

地域の防災訓練

老健まつ徳洲苑が参加

介護老人保健施設まつ徳洲苑(千葉県)は地元・松戸市小金地区の防災訓練に参加した。大規模地震が発生したという想定の下、近隣の中学校に集団で避難する訓練で、従来は同地区に所属する17町会が複数の会場に分かれ実施していたが、初めて一堂に会し大規模に行った。地域の方以外にも市や消防、中学校の各関係者ら約400人が参加した。

同施設は、消防団が介護施設から利用者さんを避難させる訓練に協力。利用者さんに扮し車いすに乗った同施設の職員3人を、駆け付けた消防団に所属する一般の方が中学校まで避難させた。途中、フットブレイキなどの操作方法がわからず、職員がアドバイスする場面も見受けられた。

訓練は無事終了。池田喜代志・大金平消防署長は、「災害の発生が夜間であれば、職員数は限られるので地域の方の協力が不可欠。今回のような訓練は有意義です」と強調。利用者さん役を務めた川上かおり介護副主任(介護福祉士)は「車いすに乗っている利用者さんの不安な気持ちを実感しました。地域の方と交流する機会をもっと増やしていきたい」。



車いすに乗り避難場所に誘導される利用者さん役の職員